

# ムビン・シェパード

## 元イギリス人植民地官吏の歴史学者

山本 博之

月刊誌『カラム』が刊行されていた1950年から1969年までのマレーシア（マラヤ）は、独立準備期からマラヤ連邦の独立（1957年）、マレーシア結成（1963年）、シンガポールとの分離（1965年）を経て、1970年代以降の経済開発を迎えるまでの時期と重なる。これは、マレー人社会で語り継がれてきた英雄ハン・トゥアがマレー・ナショナリズムの象徴としての地位を確立し、映画などを通じて国民に広く受け入れられていく時期と重なっている。

### カラムにおける英雄ハン・トゥアの扱い

興味深いことに、『カラム』には、文学作品である『ハン・トゥア物語』（Hikayat Hang Tuah）への言及を除けば、ハン・トゥアに関する記事はほとんど見られない。わずかな例として、1950年10月号に掲載されたブルハヌッディンによる「マレー人かマラヤン人か」（Melayu atau Malayan）と題する記事で、マレー・ナショナリズムの闘争はハン・トゥアのよく知られた「ムラユの民はこの地から失せることなし」という言葉に集約されているという記述がある〔*Qalam* 1950.10:39〕。

また、1950年11月21日付けの『ストレート・タイムズ』（*Straits Times*）紙にマレー人がマラヤン民族（*bangsa Malayan*）になるというオン・ジャアファルの構想が掲載されたのに対し、多くの人がオンを（マレー人の将来ではなく）マラヤの将来を考えた長期的展望を持つ人物であると好意的に評していることについて、『カラム』は1951年1月号の「苦いコーヒー」（*Kopi Pahit*）のコラムで、オンの構想はマレー人の将来を危うくするものだとして批判した。マレー人政党の統一マレー人国民組織（UMNO）を創設したオンは現代のハン・トゥアと称されたが、今ではオンは「ムラユの民がこの地から失せる」になってしまったと批判した〔*Qalam* 1951.1:43〕。

なお、1951年10月号の巻頭言「注意せよ」（*Perhatilah!*）

では、1951年9月16日にクアラルンプールのマジェスティック・ホテルでUMNOの総会を開催したオンについて、1946年にマラヤン連合案に反対したことで「ハン・トゥア」と呼ばれたと書いている〔*Qalam* 1951.10:1〕。

これらの記事を除けば、『カラム』にはハン・トゥアに関する記述がほとんどない。

### 国民的映画『ハン・トゥア』と 英国人植民地官吏ムビン・シェパード

『カラム』には、1956年に劇場公開された映画『ハン・トゥア』についても言及がない。マラヤ連邦の独立前年に公開された『ハン・トゥア』は、マレー映画の事実上の初のカラー作品であり、多くの人々の関心を集めた。マレー・ナショナリストたちは、脚本は古典文学の『ムラユ王統記』（*Sejarah Melayu*）や『ハン・トゥア物語』ではなくその簡略版で英語版『ハン・トゥアの冒険』（*The Adventure of Hang Tuah*）に基づいており、映画はハン・トゥアに関する多くのエピソードのごく一部しか描いていないこと、しかも英語版『ハン・トゥアの冒険』を書いたのはイギリス人の植民地官吏であること、さらに監督はインドから招かれたインド人で、ハン・トゥアに歌を歌わせているどころか、その歌がハン・トゥアの時代に存在しないはずの西洋音楽の影響を受けた曲であることなどを批判した。それにもかかわらず『ハン・トゥア』は大きなヒットとなった。劇中でハン・トゥアが歌った歌は多くの人が集まる機会に歌われるようになり、後に元マラヤ共産党員の集まりでもこの曲が使われたほどだった。

この映画の脚本の元になった『ハン・トゥアの冒険』を書いたのは、イギリス人植民地官吏で歴史学者のムビン・シェパード（Mubin Sheppard, 1905-1994）だった。ムビンは1905年6月21日にアイルランドで生まれた。マールボロ・カレッジを経てケンブリッジ大学で歴史学を学んだ後、マラヤ文官職のカデット（候補生）として1928年にマラヤに配属された。『ハン・トゥアの冒

険』を出版したほか、マラヤの歴史に関する多数の本を書いている。

マラヤ連邦の独立後もマラヤに留まることを選び、国立文書館の館長(1958年)や国立博物館の館長(1959～1963年)を務め、政府の文化政策の一端を担った。王立アジア協会マラヤ(マレーシア)支部(Malayan (Malaysian) Branch of Royal Asiatic Society)の副総裁(1949～1994年)を務めるとともに、同会の編集長(1971～1994年)および事務局長(1972～1988年)を務めた。マレーシアの歴史に関する20冊の著作と多数の記事を残し、1994年9月11日にマレーシアで亡くなった。

本稿では、ムビンの自伝[Sheppard 1979]をもとに、王立アジア協会マレーシア支部ジャーナルのムビン・シェパード追悼特集号の所収記事も参考にして、1928年に最初にマラヤに赴任してから1960年代末頃までのムビンの経歴を整理する。ムビンがマレー人の社会的地位の向上に尽力していた様子とともに、マレー人の宗教と文化に特に関心を持っていたことがわかるだろう。これによって『カラム』が刊行されていた時期のマラヤ社会を別の角度から見ることができる。

なお、ムビンは1958年(1957年説もあり)にイスラム教に改宗し、それに伴ってもとの名前であるマービン(Mervyn)からムスリム名のムビンに改名したが、本稿では煩雑さを避けるために改宗前も含めてムビンと呼ぶ。

## ■ パハン州テメローで文官職候補として勤務 —— 歴史研究への意欲を持ち、マヨンに触れる

ムビンはマラヤ文官職の候補生として1928年にマラヤに配属された。かつてマラヤで勤務したベテランの植民地官吏であるヒュー・クリフォードがアフリカなどでの勤務を経て24年ぶりに東南アジアに戻り、植民地行政の長である高等弁務官になっていた。

クリフォードは1883年に17歳で候補生としてマラヤに配属され、最初の数年をペラ州で過ごした後、任期のほとんどの時期をパハン州で過ごした。ペラ州ではほぼ未開のジャングルに覆われた約4万平方キロメートルの土地を徒歩やボートで移動し、何か月もの間マレー語しか話さない状況に置かれていた。そのため、クリフォードが1927年にマラヤに復帰したとき、マラヤ文官職の新任の候補生に対して、着任して最初の1年間を遠隔地で過ごすこと、そのうち少なくとも1人はパハン州に行くことを指示した。ムビンはこ

の指示でパハン州に行くことになった最初の候補生だった。

1928年1月にマラヤに到着したムビンたち7人はクアラルンプールで面接を受けて配属先が決められた。4人はマラヤでマレー語を学び、1人は中国で中国語を学び、2人は南インドでタミル語を学ぶことになった。ムビンはマレー語を学ぶことになり、配属先はパハン州のテメローに決まった。パハン州での勤務が決まったとき、ある先輩官吏が、配属先で孤独を感じたらこの本を読めばクリフォードは40年前にもっと孤独で不安だったと知って少しは気休めになるかもしれないと言い、クリフォードがパハン滞在の経験を書いた『王宮と村落』(*In Court and Kampong*, 1897年刊行)を貸してくれた。

ジャングルに囲まれていたテメローはモンスーンによる洪水とマラリヤに悩まされる地域だった。ムビンが着任する前年の洪水で5,000頭の水牛が死に、郡役所は生業支援のため南タイから数百頭の水牛を購入していた。スコット系で愛想の悪いスミス郡長のもと、ムビンは住民によって放し飼いにされた気性の荒い水牛を1頭ずつ探しては左の角に刻印された番号を確認する水牛管理の作業を行った。

州内のクアラリピス郡にはマラヤ文官職でも数少ないアイルランド系のリンハン郡長がいた。ケンブリッジ大学で歴史学を学んだリンハンは勤務の合間にパハンの歴史研究に取り組んでおり<sup>1)</sup>、同じく大学時代に歴史学を学んでいたムビンの歴史研究への意欲がかきたてられた。

1928年6月、ムビンは国王誕生日の祝日と重なって3日間になった週末休暇を過ごすためにクアラルンプールを訪れた。マラヤ文官職の宿舎はマラヤ各地から来た独身者であふれており、ムビンは簡易ベッドと蚊帳を借りてベランダで寝ることになった。約20人の同僚とともに、当時のクアラルンプールで最も良質の娯楽だったバンサワン(マレー・オペラ)に行った。ホールは満席だったが、劇団の支配人と知り合いの同僚を通じて座席を確保することができた。上映されたのはマヨン(Ma' Yong)と呼ばれるダンス劇だった。後にムビンはマヨンの研究と発展に取り組むことになる。

1928年6月にマラヤ文官職のマレー語試験が行わ

1) W. Linehan(1892-1955)。著書にLinehan, W. 1973. *A History of Pahang*. Kuala Lumpur. Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society.がある。

れた。40人が受験し、合格したのは5人だった。そのうち4人は教育局勤務で、候補生で合格したのはムビンだけだった。ムビンはテメローでの滞在を7か月半で切り上げられ、9月にクアラルンプールの植民地官房に異動した。

## **KLでマレー人の教育と雇用促進に尽力 ——タンジュンマリムではマレー劇団を組織**

クアラルンプールでムビンは都市部のマレー人の問題に関心を向けた。中国系やインド系は子どもたちに英語教育を受けさせようとしたが、年配のマレー人は宗教的信念を弱めることになるからと子どもたちの英語教育に消極的だった。その結果、役所の書記官の多くはタミル人で、民間会社の従業員は中国系で、役所も民間会社も欠員が出たときには連合マレー諸州(FMS)以外の州で人員を探していた。ムビンは、国家運営のより重要な役割をマレー人が担うようになることが大切だと考え、マレー人の雇用促進のための委員会を組織した。

クアラルンプールのマレー人と接するうちに、同地のヨーロッパ人はほとんどがキリスト教の信仰に関心を払っていないのに対し、マレー人は大部分が毎週金曜日にモスクに集まっており、ムビンはイスラム教に対する関心を強めていった。(以上、第1章)

ムビンは1929年10月にクラン郡の郡長補佐に、そして1930年1月にタンジュンマリム準郡の郡長補佐になった。1930年には、FMSの農村部の30歳以上のマレー人は読み書きができず、ある村では、モスクでコーランを詠んでいたことを除いて、30人の子どもたちは全く教育を受けていなかった。ムビンの働きかけで、親たちが資金を出しあって茅葺きの校舎を建て、小学5年を修了した若者に子どもたちに読み書きと計算を教えてもらうことになった。

タンジュンマリムの町から1マイルほどの距離にあるスルタンイドリス師範学院には、マラヤ各地から生徒が集まり、流暢なマレー語を話すヨーロッパ人教員のもとで学んでいた。学期末にはマレー演劇が披露され、教員のザアバが企画したハムレットは高い評価を得た。これに着想を得て、ムビンはタンジュンマリムで地元のマレー劇団を組織した。

ムビンは1930年7月にペラ州の理事官の官房補佐になってタイピンに移った。タイピンとイポーでマレー人の雇用機会が少ないと知ったムビンは、マレー人の雇用機会増大のために尽力し、このためヨーロッ

パ人から「マレー人狂い」と呼ばれた。

ペラ州ではスルタンからマレー人の2つの秘密結社について報告を受けた。それまでマレー人が組織する秘密結社は存在しなかった。2つの秘密結社がペラ州のマレー人にそれぞれの秘密結社に加わるよう強要したため、スルタンを委員長とする特別対策委員会が組織された。

ムビンは1932年1月に勤務を終えて8か月間の休暇が与えられた。(第2章)

## **顧問官補佐から植民地官房第二書記官へ 終戦後にはマラヤ広報局に**

ムビンは1932年10月に職場に復帰し、イギリス人顧問官補佐としてトレンガヌ州クママン郡に着任した。東海岸であるトレンガヌ州へは貨物船で移動した。クママンに着任する顧問官補佐はいずれも40歳前後で、27歳だったムビンは戸惑いをもって迎えられた。東海岸では11月頃からモンスーンの季節になり、屋外でできることはほとんどなかった。

10月4日のスルタン誕生日にクママンのマレー歌劇を披露することになり、「アリババと40人の盗賊」を演じることにした。マレー人は誰でもこの物語のあらすじを知っていたために稽古しやすかった。(第3章)

1935年10月にマラッカ州のアローガジャ郡で郡長になり、職務遂行のかたわら花崗岩の巨石の調査をはじめとする考古・歴史の調査も行った。さまざまな娯楽に満ち溢れるマラッカ州での任期を終えると、娯楽がほとんどなく野生状態に近いクママンに戻りたいと志願し、1936年2月からクママンの郡長を勤めた。(第4章)

1938年1月に植民地官房の第二書記官としてクアラルンプールに移った。当時FMSには図書館がなかったため、ムビンは読書クラブを作り、すべての政府書記官に会員登録を促した。月例読書会の参加者が増え、植民地官吏以外にも参加の希望があったため、しだいに大きな会場で行うようになっていった。

マラヤでの滞在期間が10年になった頃、マレー人女性との結婚を真剣に考えるようになった。ただし当時のマラヤ文官職は異民族との結婚を抑制する傾向が残っていた。シンガポールにいた別のマラヤ文官職の妹を紹介され、1940年1月に34歳で結婚した。妻のローズマリーは36歳だった。

結婚の8か月後にムビンの父親が亡くなった。1940年12月に妻と一緒にペナンから出航して、ケープタ

ウンをまわって2か月後にグラスゴーに到着した。父の死に伴う諸手続きを終えてマラヤに戻ろうとしたが、第二次世界大戦のために船が不足しており、パナマ、ロサンゼルス、ホノルルを経て13週間かけて7月にシンガポールに到着した。

1941年9月にペラ州バトゥガジャ郡に配属され、12月にFMSの義勇軍の中隊長になった。日本軍との戦闘が始まるとしだいに南に逃げ、1942年1月にシンガポールにたどり着いたところで熱帯性腸チフスで3週間入院した。2月にシンガポールで連合軍が日本軍に降伏し、ムビンを含むヨーロッパ人は捕虜としてチャンギ収容所に入れられた。ムビンは日常的な作業に参加できるほど体力が回復するまで数か月かかった。日本兵は捕虜たちに収容所で野菜を栽培するよう指示したが、堆肥がなかったため、ムビンは週に3回、収容所の外に出かけて刈った草を持ち帰る役割を命じられた。外出の機会を得たムビンは、通信文を書いた紙を小さく折りたたんだものを託され、秘密の通信係になった。やがて通信役のことが日本兵に知られ、ムビンはYMCAビルの憲兵隊本部で6週間にわたって尋問された。チャンギ収容所に入って約2年と3か月後にサイム・ロード (Sime Road) の収容所に移された。(第5章)

日本の降伏後、ムビンはリアウ諸島で日本軍を武装解除し、戦争中の残虐行為の調査を行った。マラヤは1946年1月に新しく広報局を組織することになり、4月に民政移管されるとムビンの広報局での本格的な仕事が始まった。ムビンは広報用のドキュメンタリー映画制作の必要を訴え、バンサー・ロードにあった日本の製紙工場跡を引き継いで政府の映画スタジオにした。1946年10月に妻が娘とともにマラヤに来た。(第6章)

## クラン郡長として共産主義勢力に対抗 — 演劇制作や広報誌刊行にも従事

1947年11月にスランゴール州クラン郡の郡長になった。農業クラブを組織し、メンバーが出し合った資金でスモークハウスを作ったが、火事で焼けたために再建資金を集める必要が生じた。クランはクママンとは異なりアマチュア演劇の伝統はなかったが、ムビンは地元の人たちで演劇を行うことにした。銃撃戦、村長の娘の誘拐、農業クラブのメンバーによる殺人事件を織り込んだ「赤い橋」という演劇を作り、人気のマレー歌曲を多く脚本に取り入れることで人気を博

し、スモークハウスの再建費用を得ることができた。

スランゴール州スウェッテナム港沖のクタム島には中国系住民が多く住んで独特の空間を作っており、日本軍政期でも日本軍の統制が名目的にしか及ばないほどだった。ムビンはクタム島に3泊4日逗留して島の住民の登録を進めた。また、スウェッテナム港では豚の違法屠殺が行われており、衛生管理上の問題があるとともに秘密結社の資金源になっていたため、違法業者を取り締まった。

スウェッテナム港はマラヤ鉄道によって運営されており、労働者はすべてインド人だった。マラヤに共産主義の影響が拡大しつつあり、1948年5月にスウェッテナム港で17日間の全面ストが起こった。ムビンはマレー人労働者を派遣することでストを破れると提案した。安全のために送迎付きの80人のマレー人労働者が派遣されて2日目にストが破れた。ムビンはストが終わった後もマレー人労働者の雇用を継続することを条件にしており、スウェッテナム港にマレー人労働者が雇用されるようになった。

共産主義勢力との対立はますます緊張し、1948年6月28日に非常事態が宣言され、共産主義ゲリラへの対抗が主要な任務になった。スマトラとの間で行われていた武器の密輸を摘発し、女性の工場労働者のための社会福祉センターを設立した。非常事態宣言によって居住者に捨てられて空き家になっていた元労働組合本部を使い、1948年12月に社会福祉センターの活動を開始した。女性教師が英語と華語を教え、夜間クラスでは裁縫、歌、調理などを教えた。そのうちに付近に住むマレー人村長が自発的にマレー語を教えるようになった。

郡長としての仕事には留まるところがなく、休みなく仕事をしていた。1948年5月にムビンがクタム島に行っている間、妻と娘と一緒にクアラルンプールのホテルで1泊してくると言って家を出て、家に戻ってきたのは7か月後だった。(第7章)

国家作戦執行委員になっていたムビンは共産主義ゲリラ討伐のために1950年にクランタン州を訪れた。クランタン州のスルタンの娘の結婚式に出席すると、マヨン、マノラ、ワヤンクリが披露された。

1950年12月、独身だったところが亡くなり、ムビンは幼少期に育ったカブラ (Cabra) にある城と1,000エーカーの農地をムビンが相続したとの連絡がきた。しかしクランタン州で共産主義ゲリラと戦っている最中で、国家が深刻な危機にさらされている状況でマ

ラヤを去ることはできないと考え、ムビンはアイルランドに戻らなかった。

ヌグリスンビラン州のスレンバンでは、共産主義ゲリラがジャングルで中国語の宣伝チラシを印刷して住民に配っていたため、ムビンは『勝利の精神』(Semangat Kemenangan)というマレー語の月刊の政府広報紙を刊行し、警察と学校とモスクに配布した。ムビンが共産主義ゲリラに対抗するために15分間のドキュメンタリー映像を作成してスレンバンで上映すると、その映画は後にマラヤ各地で上映された。

スレンバンには図書館がなかった。ムビンは図書館を開業しようとしたが、宝くじ販売は違法だったため、資金集めのためチャリティー試合を行い、チケットを売って2万5,000ドルを得た。

### ■ **ハン・トゥアをフィーチャーした 歴史野外劇の企画を成功**

1952年頃、マラッカ州民を除けば、マラヤの歴史を知っているマレー人はほとんどいなかったし、学校でもマラヤの歴史はほとんど教えられていなかった。ムビンは1952年9月にトライシンガム(E.E.C. Thuraisingham)にこの問題の解決に取り組むよう提案し、1953年2月にクアラルンプールで開かれた懇談会でマラヤ歴史協会(Malayan Historical Society)の設立準備を進めることになり、設立準備のためにムビンを含む5人の特別委員会が任命された。1953年4月にクアラルンプール市庁舎でマラヤ歴史協会が設立され、パハン州の元宰相のマフムド・マツ(Mahmud bin Mat)が初代総裁に選ばれ、ムビンは6人の評議員の1人になった。

ヌグリスンビラン州バハウのグレンデル農園は地理的に孤立していて共産主義が深く浸透しており、1954年10月には副マネージャーのハント(T. Hunt)が共産主義ゲリラによって射殺された。1955年3月1日、軍と警察が包囲する状態でグレンデル農民の従業員を別の場所に移動させた。

ムビンは自らの発案で1952年に設立された国家マレー人経済開発委員会の議長をつとめていた。ムビンは村落部で住民に話をする機会があり、この国の経済の主要な部分をマレー人が確保しないうちに独立しても苦難の道が待っているだけだと自説を話した。これが独立を進めているUMNOへの批判であると受け取られ、ヌグリスンビラン州のUMNO指導部はムビンをイギリス人顧問官職から解任するよう求めた。

1955年11月、ムビンはアブドゥル・ラーマンに面会し、独立後もマラヤで奉職したいという希望を伝えた。アブドゥル・ラーマンが独立交渉のためイギリスに行っている間、ムビンに対するUMNO指導部の誤解が解けた。(第8章)

ムビンはマラヤに残りたいという意向を高等弁務官にも伝えていた。1956年6月、ヌグリスンビラン州のイギリス人顧問官だったムビンは半島部全域でコメ供給の統制を行うことで共産主義ゲリラ対策を行った。

エリザベス2世の戴冠式の一環としてスレンバンで歴史の野外劇が行われることになり、ムビンが企画を担当した。これが評判になり、アブドゥル・ラーマンの後援により1956年7月にクアラルンプールのレイクガーデンでマレー文化フェスティバル(PESTA)が行われた際に、ムビンは歴史野外劇の企画を任された。スレンバンでは15世紀のマラッカ王国から現在の共産主義ゲリラ対策までの歴史を描いたが、レイクガーデンでは場所の制約のためにマラッカ王国に焦点を絞り、伝説の英雄ハン・トゥアとその冒険を際立たせた。3日間の野外劇が終わると、アブドゥル・ラーマンから「ハン・トゥア野外劇の成功おめでとう」という感謝状を贈られた。

### ■ **プタリンジャヤに暮らしてイスラムに改宗 1958年にはマラヤ国民に**

クアラルンプールでは衛星都市プタリンジャヤに住むことになり、木造で高床式のマレー建築の家を建てることにした。プタリンジャヤは1954年に開発が始まったばかりで、木造の家を建てるとう高級感を損ねるという批判もあったが、モンスーンによる洪水での中断を経て10か月後の1958年3月に入居した。

1958年9月にスレンバン時代の友人のハジ・ハッサンが脳卒中で亡くなった。日本軍による戦争捕虜だったときにムビンは神との精神的なつながりの必要性を確信し、収容所から解放されるとキリスト教会の礼拝に出席したが、日曜日でもほとんど人が集まっていなかった。それに対してモスクには毎週金曜日に多くのイスラム教徒が集まっていた。1952年にスレンバンに着任すると、ハジ・ハッサンからコーランを借りて基礎からイスラム教について教えてもらった。

プタリンジャヤに入居して1、2週間後、ジョホール州の情報担当官で親友のサイド・ザイナル・アビディンにイスラム教に改宗したいと打ち明け、改宗の証人

になってもらった。ムスリム名は本名のマービンに近いムビンにした。

1957年2月にアブドゥル・ラーマンがロンドンでの独立交渉を終えて帰国した。ムビンは再び8月にレイクガーデンで行う歴史野外劇の企画を任された。1957年8月にマラヤ連邦が独立した後、ムビンはアブドゥル・ラーマンから公文書、博物館、文化研究、図書館の職務を兼ね備えた役所を作りたいと言われ、公文書館の館長に任じられた。植民地官吏ではなくマラヤの公務員になったためにムビンはマラヤの国籍をとることにして、1958年1月にマラヤ国民になった。

### マレー演劇研究を進め、映画脚本を執筆、 国立博物館開設にも貢献

ムビンは国立博物館の開設にも関わった。1階の歴史ギャラリーにはハン・トゥアの等身大のレリーフを置くことにした。レリーフの頭上にハン・トゥアの「ムラユの民はこの地から失せることなし」の言葉を入れることで、マレー人の伝統、性格、アイデンティティ、哲学を現代に伝えるという意図があった。

文化研究では、植民地官吏であるリチャード・ウィルキンソンとリチャード・ウィンステッドが1908年から1910年のあいだにマレー人に関する3つの文章を発表していたが、東海岸諸州についての記述はムビンにとってとても満足できるものではなかった。特にマレー演劇については、ムビンは1951年のクランタン滞在中にウィルキンソンの文章の誤りに気づいていた。マレー演劇について記事を書こうと思ったが、文献資料は存在しなかったため、ムビンは毎週末トレンガヌ州のマヨン舞台に通い、9つの主要な物語をはじめとする様々な情報を収集・記録した。トレンガヌ州へは1人で車を運転し、往復の時間に映画の脚本を考えた。『ドクンの婚約』(Tunang Pak Dukun)で、1961年に映画が制作された。監督はRoomai Noor、主演は戦前のバンサワンのベテラン俳優のYemおよびAbdullah ChikとRose Yatimahだった。

博物館の各ギャラリーの展示物を各地から集めるのにとっても苦労したが、1963年8月31日に国立博物館を開館させることができた。(第9章)

### マラヤ・イスラム福祉組織名誉会長を務め ウスマ・パラワン設立に尽力

退職前にたまっていた348日間の有給休暇を取り、1964年10月に退職した。マラヤ文官職とマラヤ公務

員をあわせて35年と4か月の勤務だった。アイルランドに一時帰国して城と農場を売却した。

1950年6月にメッカ巡礼を果たした。帰国後は中国系にイスラム教の価値を伝えたいと考え、半島部各州をまわった。1960年8月にマラヤ・イスラム福祉組織(PERKIM)が設立され、ウバイドゥラ(S.O.K. Ubaidullah Haji Mohamed Ali)が会長になり、ムビンは名誉会長に選ばれた。PERKIMは中国系へのイスラム教の宣教を主要な任務としており、ムビンはまずかつての任地であるクランで活動することにした。ムビンは民族間統合のためには宗教を同じくするのがよいと考えたが、中国系がムスリムになるとマレー人になったとみなされ、そのため本来のマレー人の仕事が奪われてしまうという懸念があった。宗教局は改宗者にもとの姓をなくして名前の後に「bin Abdullah」をつけるように指示しており、このことが中国系の改宗者とマレー人の区別を難しくする原因の1つとなっていた。PERKIMでは中国系の改宗者に出す改宗証明書に華人姓を書くことでマレー人でないことを示し、宗教局にもその方法に倣うよう求めた。

ムビンは1963年末にPERKIMのフルタイムの名誉事務局長になった。東南アジアには9,600万人以上のムスリムがいたが、当時は相互の接触がほとんどなかったため、交流を増やすことを目的に、1964年2月にクアラルンプールで世界ムスリム会議の主催による東南アジア・ムスリム地域会議を開催した。

1965年、PERKIMはダフル・アルカムと呼ばれる小規模の宣教訓練センターを開設した。月刊の広報紙『教友』(Sahabat)を刊行し、ムビンが編集を担当した。

1966年、ムビンは退役後の元軍人の生活の問題を軽減するため、退役軍人の事務所ビルを建てて賃料で収入を得ることを提案した。8年の年月を経て1974年9月に建物が完成し、ウスマ・パラワン(Wisma Pahlawan)と名付けられた。エレベーター係に雇用された片腕の元軍人はムビンに「国立博物館とウスマ・パラワンの2つはあなたの功績を記した2つの記念碑です」と感謝を伝えようとしたが、間違えて「記念碑」を「墓石」と言ってしまった。ムビンはそれでは自分が死んだことになると思ったが、「トラは死して皮を残し、人は死して名を残す」というマレー語のことわざを思い出し、自分の死後に残るものがあったことを喜んだ。(第10章)

## 「現地化した外来者」による 現地文化発信・振興から捉える時代と社会

アイルランド出身のイギリス人としてマラヤに赴任したムビン・シェパードは、まず現地語と現地文化を身に付けよという先輩官吏からの指示を忠実に守り、マレー語を身に付け、芸能や建築をはじめとするマレー文化に関心を寄せた。マラヤがイギリスから独立した後マラヤに留まり、イスラム教に改宗して、歴史や芸術の分野を中心にマレー文化振興の中心的な役割を担った。

旧植民地国家の文化に関して、宗主国から持ち込まれた文物や思想を現地人が受け入れる際に改変が加えられ、その過程で西洋起源の文物や思想が現地化されるという議論がある。実際にはそれほど単純ではなく、宗主国出身者が現地化して現地文化を発信し、推進することも見られる。

外来の文物や思想を積極的に取り入れてきたマラヤでは、宗主国以外からも文物や思想がもたらされた。ムビン・シェパードは、現地化した外来者が現地文化を見出してそれを積極的に振興しようとした好例であるが、同様の役割を果たした人物は他にも少なくない。『カラム』を発行してマレー世界におけるイスラム教の位置づけを考えながら「マレー人」のあり方について誌面を通じて発信していたエドルスも、そのような人物の1人だった。ムビン・シェパードのような人物に積極的に目を向けることで、『カラム』が刊行されていた時代と社会についての複層的な理解が可能になるだろう。

### 資料 ムビン・シェパードの著作一覧

1947. *The Malay Regiment, 1933-1947*. Kuala Lumpur: Department of Public Relations, 52p. (repr. 1950.)
1949. *The Adventure of Hang Tuah*. Kuala Lumpur: The Commercial Press. 114p. (republish by Donald Moore for Eastern Universities Press, Oxford University Press (1975), Penerbit Fajar Bakti (1993).)
1953. *A Short History of Malaya*. Kuala Lumpur: Government Press. 13p. (republished as *Historic Malaya* (1956).)

1956. *Malay Courtesy*. Donald Moore for Eastern Universities Press. (4 editions up to 1981). 36-47p.
1956. *Historic Malaya: An Outline History*. Donald Moore for Eastern Universities Press. (revised 1959). 29p. (republished in Malay as *Tanah Melayu yang Bersejarah*, 1982.)
1957. *A Short History of Sultan Abu Bakar of Pahang*. Donald Moore for Eastern Universities Press. 36p.
1960. *The Magic Kite and Other Ma 'Yong Stories*. Singapore: Straits Times Press. 50p.
1961. *Malayan Forts*. Kuala Lumpur: Information Department.
1965. *A Short History of Negri Sembilan*. Malayan Historical Series No.3. Donald Moore for Eastern Universities Press. 114p.
1969. *Tun Perak: Malacca's Greatest Bendahara*. Kuala Lumpur: Longman. 118p. (republished in Malay (1976).)
1972. *Taman Indera: Malay Decorative Arts and Pastimes*. Kuala Lumpur: Oxford University Press. 207p. (reprinted as *A Royal Pleasure Ground*, Oxford University Press, 1986.)
1974. *Cerita-Cerita Makyong*. (buku 1 & 2) Federal Publications. 62p.
1978. *Living Crafts of Malaysia*. Times Books International. 118p.
1979. *Taman Budiman: Memories of an Unorthodox Civil Servant*. Heinemann Educational Books. 278p.
1980. *Mekarnya Seni Pertukangan Malaysia*. Donald Moore for Eastern Universities Press.
1983. *Taman Saujana: Dance, Drama, Music and Magic in Malaya Long and Not-so-Long Ago*. International Book Service. 114p.
1984. *Tunku: A Pictorial Biography, 1903-1957*. Pelanduk Publications. 168p.
1986. *Klang, Twenty Centuries of Eventful Existence*. Pelanduk Publications. 58p.
1987. *Tunku: A Pictorial Biography, 1957-1987*. Pelanduk Publications. 155p.
1995. *Tunku: His Life and Times. The Authorized Biography of Tunku Abdul Rahman Putra al-Haj*. Pelanduk Publications. 230p.

### 参考文献

- Sheppard, Mubin. 1979. *Taman Budiman: Memories of an Unorthodox Civil Servant*. Kuala Lumpur: Heinemann Asia.